

会 議 録

会議の名称	令和7年度 第3回茨木市文化振興施策推進委員会
開催日時	令和8年3月27日(金) (午前・ 午後) 3時00分 開会 (午前・ 午後) 5時00分 閉会
開催場所	市役所南館3階 防災会議室
委員長	出口委員
出席者	池上委員、川本委員、雨森委員、常盤委員、出口委員、井岡委員、 落合委員、木村委員、宮崎委員 【9人】
欠席者	平田委員、原田委員
事務局職員	中井市民文化部長、今西市民文化部次長兼文化振興課長、 松本文化振興課参事、能勢文化振興課長代理兼政策係長、 秋本文化振興課主査 【5人】
開催形態	公開
議題(案件)	(1) 「つどい、つながる文化の会議」の事業評価について (2) その他
配布資料	(1) 次第 (2) 「つどい、つながる文化の会議」活動実績報告書 (3) 令和7年度「つどい、つながる文化の会議」の事業評価報告書
傍聴人	なし

発言者	発言内容
事務局 (今西次長)	<p>本日は、公私何かとお忙しい中、ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。ただ今より、茨木市文化振興施策推進委員会を開催させていただきます。</p> <p>はじめに、新任の委員の方をご紹介します。昨年、飯嶋委員より委員交代の申し出があり、後任として、茨木市音楽芸術協会理事の井岡様にご就任いただいております。</p> <p>井岡委員、これからどうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>つづきまして、今年度の最後の委員会となりますので、市民文化部長の中井からごあいさつを申し上げます。</p>
事務局 (中井部長)	<p>みなさん、こんにちは。市民文化部長の中井でございます。令和7年度 第3回茨木市文化振興施策推進委員会の開催にあたりまして、委員のみなさまに、一言ごあいさつを申し上げます。本日は、年度末の公私何かとご多用の中、ご出席をいただきましてありがとうございます。特に、専門部会委員兼任の常盤委員、宮崎委員のお二人におかれましては、お忙しい中、「つどい、つながる文化の会議」のプログラム当日に足を運んでいただき、また、今年度もタイトなスケジュールで事業評価に係る報告書を作成いただき、誠にありがとうございました。そして、本日の委員会より茨木市音楽芸術協会の理事でいらっしゃる井岡委員にご出席いただいております。これまでのご経験を踏まえ、ご意見頂戴できますこと、よろしくお願い申し上げます。今年度は、他分野における様々な取組にふれながら、座学中心のプログラムとなっていましたが、ビジョンボードの作成をとおして、「文化の会議」のイメージや市民アートコーディネーターの役割の具現化が図られたことと思います。今年度の活動を振り返りながら、次年度の活動をよりよいものにするべく、答申に向けて「『つどい、つながる文化の会議』の事業評価」について、ご審議いただければと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。委員の皆さまにおかれましては、引き続き本市の文化芸術振興に格別のご高配を賜りますようお願い申し上げます。出口委員長をはじめ、委員の皆さま、本日はどうぞよろしくお願いいたします。</p>
事務局 (今西次長)	<p>それでは、出口委員長、議事進行をよろしくお願いいたします。</p>
出口委員長	<p>会議次第に沿って議事を進めさせていただきます。最初に、委員の出席状況について事務局から報告をお願いします。</p>
事務局 (今西次長)	<p>委員の出席状況を報告いたします。全委員は11人ですが、平田委員及び原田委員からはご欠席、また宮崎委員からは所用で会議途中からオンラインにてご参加の旨</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>のご連絡をいただいております、本日、現時点でご出席の委員は8人ということで、過半数の出席をいただいておりますので、茨木市文化振興施策推進委員会規則第6条第2項により、会議は成立しております。</p> <p>また、本委員会は、原則、会議録及び会議資料も含めて公開で運営することといたしましたので、前回と同様に傍聴者には事前に入室していただきますが、傍聴の申込がなかったため、このまま進めさせていただきます。</p> <p>それでは、会議次第に沿って議事を進めてまいります、会議の終了は、午後5時頃を予定しておりますので、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。まず、案件について事務局から説明をお願いします。</p>
事務局 (今西次長)	<p>本日の案件は、「令和7年度『つどい、つながる文化の会議』の事業評価について」となります。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。第2回委員会の書面開催にて、報告書の内容は委員の皆様にご確認いただいたところではありますが、冒頭、報告書を作成いただきました常盤委員から補足等ございましたら、よろしくお願いいたします。</p>
常盤委員	<p>1点思い出したことがありましたのでお伝えします。今回の評価報告書の様式を事務局から頂いた際、評価指標2の「誰もが文化芸術とつながれる環境がつけられている」という項目において、「note記事のビュー数については、受託者からの連絡があり次第共有」と記載されておりました。しかし、その部分に関しては特に詳細を記載せずに提出しました。note記事については実際に私も読ませていただきましたが、読み物として面白い部分はあったものの、広報としてどれだけ訴求効果があったかは確認できませんでした。そのため、もし事務局の皆様がビュー数に関するデータをお持ちであれば、ぜひ共有いただければと思います。また、フォロワー数については、おそらく関係者の人数を下回っている状況ですので、次年度以降は身近な人々からフォローを促していくことが必要ではないかと感じました。</p>
出口委員長	<p>noteというのは現在流行しているブログのようなものです。受託者が主導して更新し、参加者が記載する形式です。ページをクリックするとフォローがつき、その人数が確認できます。今のお話では「フォロワー数の確認が必要だ」というご指摘でよろしいでしょうか。</p>
常盤委員	<p>概ねその通りです。まずは身近な人々が常に読む環境から始められると良いのではないかと考えています。</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>ちなみに委員の皆様の中でnoteの記事を作成されている方はいらっしゃいますか。私はnoteの記事を作成していますので、記事のURLを委員の皆様にお送りし、ぜひご確認いただければと思います。初めての方はわかりにくいかもしれませんが、ぜひご覧いただき、可能であればフォローをお願いいたします。</p>
事務局 (秋本)	<p>noteのレビュー数について資料を準備しましたので、画面共有させていただきます。活動実績報告書でも掲載されているように、全9回分の記事のうち2回～4回の会議に関する部分はプログラム中の講義を受け、参加者が文章を記載した内容です。追って、noteのURLを委員の皆様にもメールで共有させていただきます。</p>
出口委員長	<p>常盤委員の補足がありましたが、文化の会議事業評価の総評に関して、常盤委員より解説をお願いしてもよろしいでしょうか。</p>
常盤委員	<p>2年目となる今年は、私自身も現場に二度足を運ぶことができ、参加者の方々と直接お話しする機会がありました。年度末には、受託者や一部の参加者にインタビューを行い、アンケートだけではわからなかった各参加者の考えを知ることができた点が非常に大きな成果だったと感じています。今回提出した報告書は、そうした気付きが反映された内容になっているかと思います。</p> <p>多様なモチベーションや経験を持つ人々が集まる場には非常に高い社会的価値がありますが、目指す水準ややりたい内容がそれぞれ異なる中で、どのようなマネジメントが求められるかという点は難しさがあります。運営を担当された受託者の方々にとっても難題であり、次年度の課題として挙げられている点だと思います。</p> <p>例えば、一部のディスカッションの進行に困難な面もありましたが、全体的には参加者の1年間を通じた学びの深まりが重要な成果だったと言えるでしょう。それぞれが「コーディネーターとは何か」を自身の経験や関心に基づいて考えるプロセスは非常に価値があるものでした。また日常生活や仕事にコーディネーター的視点をプラスアルファで加え、人材としてステップアップしようとする様子が見られた点はとても良かったと思います。</p> <p>特定の目標に向けて画一的に習得する空間ではなく、自身の関心に応じてコーディネーターとしての役割を身につけていく場になっていたのが良い点でした。この取り組みを通じて、市民とコーディネーターがどうあるべきかを改めて考え直すきっかけになり、今後は具体的な実践に基づいてさらに成果を進めていければと思います。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。今回は書面審査がメインであったため活動内容の説明を省略しましたが、第1回～第6回で何を行ったか、まず事務局から簡単に説明していただいた後に宮崎委員のコメントを紹介し、その後委員からの質問に移る形を取</p>

発言者	発言内容
事務局 (能勢課長代理)	<p>ればと思います。</p> <p>承知しました。それでは事務局から説明させていただきます。</p> <p>【「つどい、つながる文化の会議」活動実績報告書に沿った概要説明】</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。それでは引き続き、宮崎委員のコメントをお願いします。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>宮崎委員からの補足コメントが届いておりますので、内容を要約し、以下に記します。</p> <p>【以下、宮崎委員補足コメント】</p> <p>簡単ではありますが、所感をお伝えさせていただきます。まず、参加者の皆さま、受託者の皆さま、そして茨木市文振興課の皆さま、本当にお疲れ様でした。文化振興というと、どうしても実演や創作のコンテンツ、アーティストや実演団体など、いわゆる「つくる側」の話が中心になりがちです。しかし文化芸術というものは、それを享受する市民の存在があって初めて社会の中で意味を持つものでもあります。これは日本国内に限らず、海外で活動していても感じるのですが、「つくる側」と「受け取る側」という二項対立のような整理では、文化芸術の実際の姿を十分に説明できないことが多いと感じています。実際には、その間にはグラデーションのように多様な関わり方が存在しています。実演者と観客の間には、地域の中で文化を支える人、伝える人、つなぐ人、関心を広げる人など、さまざまな役割があり、その“間にあるもの”こそが、文化芸術が社会に必要とされる理由なのではないかと、以前から漠然と感じていました。今回の茨木市の取り組み、特に「文化的コモンズ」という考え方や、市民アートコーディネーター育成の試みは、その“間にある存在”を丁寧に言語化し、それを育てていく制度として設計されている点で、非常に先駆的な取り組みだと感じています。前例が少ない取り組みであるからこそ、一つ一つのプロセスが手探りであり、体制を整えていくことも決して簡単ではなかったと思います。評価する立場の私自身も、この一年を通して多くの現場を見させていただき、また多くの方々のお話を伺う中で、文化芸術と市民との関係について多くの示唆をいただきました。報告書にも記しましたが、本年度は、市民が安心して集い、対話し、関係性を育てる「場づくり」の段階として、着実な成熟が見られた一年だったと評価しています。次年度はいよいよその集大成となる最終年度になります。これまで積み重ねてきた知見と経験を生かしながら、市民アートコーディネーターの取り組みが一つの先行事例として形になり、そしてそれが茨木市の文化芸術振興の核の一つとして根付いていくことを、委員として心から期待しております。</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>なお、本日は、私自身オペラ公演の本番が今週末にあり、本日から劇場入りのため、会議の終盤からオンラインで参加させていただく予定です。取り急ぎではありますが、本事業評価に関するコメントとして、以上お伝えさせていただきます。</p> <p>ありがとうございます。それでは、今の件についてはまた宮崎議員がZoomに入ってきてから、ご発言いただこうと思います。</p> <p>つづいて、前回書面開催で、すでに委員の方からいただいているご質問に対して、事務局からご回答をお願いいたします。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>はい。まず、川本委員からの「参加者15名の属性について」のご質問について、年代は20代から70代まで満遍なく、幅広いご職業等の方に参加いただいております。</p> <p>つづいて、落合委員から、「参加者それぞれの出席状況について」ご質問がございました。3回目については、視察ということで、複数のグループに分かれて出席いただいております。基本的には1人1か所というグループ分けですが、中には興味ある方は複数回行っている方もいらっしゃいます。</p> <p>つづいて、今回の活動で、参加者の方がトライできたことや小さな行動の具体的な内容についてですが、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境のことを考えている団体のメンバーと繋がることができた。 ・興味がなかった分野に対しても声がかかれば自分の足で出向いてみた。 ・新しい分野のアートを学び出した。 ・対話の中で聞く側に徹する事が増えた。傾聴の姿勢でいる事で新しい発見が増えた。 ・自分の興味ある芸術を楽しむだけでなく、「社会課題」と「アート」について意識するようになった。 ・展覧会（文化振興財団主催）の受付に従事した。maru（市主催）やHUB ART PROJECT（文化振興財団主催）を他市の方に紹介した。 ・市内の美術展やワークショップに足を運ぶことが増え、仕事やボランティアとして関わるようになった。 ・幅広い年齢の方と話して理解することができた。 <p>また、後日の聞き取りからは、堺市の耳原病院に興味を持たれた参加者が視察に行かれたことや、次年度に市のチャレンジいばらき補助金に申請して事業を実施されたいというお話をお聞きしております。</p> <p>つづいて、川本委員からの「専門職アートコーディネーターの配置について、現在、本市には、専門職としてのアートコーディネーターは配置されているかまた、今回の報告に記載されている、茨木市・SPS・茨木市文化振興財団は専門職アートコーディネーターとしての役割に該当すると考えてよいのでしょうか」というご質問で</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>す。ご回答としまして、本市では、専門職としてのアートコーディネーターは配置していませんが、事業を実施する際には必要に応じて関係者をつなぐ役割を果たすよう努めております。なお、文化の会議の事業においては、SPSは受託者として、事業の企画運営を行ってもらい、文化振興財団にはオブザーバーとして、現場に、事業を俯瞰していただくような形で参画いただいております。ご質問に対する回答は以上になります。</p>
川本委員	<p>ありがとうございます。川本委員から他に何かございませんでしょうか。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>1点だけ、基本的にこの参加者の皆さんというのは茨木市在住の方がほとんどなのでしょうか。他市からも来られている状況でしょうか。</p> <p>本事業の参加要件は、茨木市在中在住、在勤もしくは在学ですので、もしかしたら市内にお住まいで、勤務先が茨木市という方もいらっしゃるかもしれませんが、お聞きしている中では、参加者の皆さんは茨木市民であったかと思えます。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。1点だけ、継続の方が7名いらっしゃるとのことでしたが、前年度の令和6年度は何人参加されていましてでしょうか。20名弱くらいですよ。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>令和6年度の参加者は23名となります。</p>
出口委員長	<p>令和6年度では23名が参加し、そのうち7名は継続して参加しています。来年度には場合によっては3年連続で参加する方もいるでしょうし、今年度新規参加された方も来年度継続参加され、2年連続での参加となる可能性があるという状況です。ありがとうございました。</p> <p>それでは、落合委員からも質問が出ていましたが、追加で質問や説明されたいことはありますでしょうか。</p>
落合委員	<p>はい、私の質問の意図ですが、この事業の評価をする上で、アンケートを通じて参加者がどのように変化したかを見るのが重要だと思っています。それに対して、参加者の参加回数のバラつきがどの程度評価の信用性に影響するかを知りたいと思いました。しかし、実際はそれほど大きなバラつきがないことがわかり、納得しました。確かに、新規参加の方と継続参加の方を比べると、継続参加の方の一部には、参加回数が少ない場合も見られるかと思えます。一方、新規の方々は初めての参加ということで、一年を通じて学びたい意欲が強く感じられます。継続参加の方々は、</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>自分の興味のあるテーマを深掘りして参加されていると解釈できる部分もあるように思いました。</p> <p>それでは、井岡委員の質問について回答をお願いいたします。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>はい、井岡委員からは「音楽に対するこのような取り組みはまだ少ないと思います。他の団体で実施している例はあるのでしょうか。また、近年、音楽大学でマネジメントの授業が行われていますが、つなぐという視点ではまだまだ不足しており、今後の課題だと考えます」というご質問とご感想をいただきました。</p> <p>回答としては、令和6年度の文化の会議では、おにクルで「みんなでつくろう！絵本と音楽のつどいの場」というイベントを実施しました。このイベントでは参加者が主体となり、企画運営を行い、参加者自身による演奏が披露されるなど、交流の場が作られました。また、豊中市立文化芸術センターでは地域の芸術文化活動の拠点として、演奏者を中心としたレジデントアーティストの活動サポートと市民アートコーディネーターの育成を目的とした「豊中アーツワゴン」という事業が行われていると聞いております。今後は他の自治体の取り組み事例も参考にしながら事業内容を検討していきたいと考えております。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございました。それでは、事業評価に関するご質問を一通りお受けしましたので、委員の皆様から率直なご意見やご感想、評価などをお伺いしたいと思います。次に雨森委員からお願いします。</p>
雨森委員	<p>今年度は2年目ということもあり、事業評価の文面からも場として充実してきていると感じます。特に重要だと考えたのは、常盤委員のおっしゃったように、育成というよりも市民それぞれが持つスキルや特性、専門性を、どう活動へ繋げていけるかという点です。</p> <p>気になった点は、報告書の2ページに書かれた概要の目的に書かれている、「文化芸術を通じたゆるいつながり（＝文化的コモンズ）の形成に向けた“コーディネーターの育成”を目的とした活動」という記載についてです。ここで書かれている「コーディネーター」が、専門職のコーディネーターなのか、市民アートコーディネーターのことを指すのか不明瞭に感じました。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。それでは事務局からご回答いただいてもよろしいでしょうか。</p>
事務局 (今西次長)	<p>ご指摘の通り、表記に関しては立ち位置や役割の違いが活動を通じて明確になってきた部分もあると思います。記載については、現状足りない部分が散見されます</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>ので、意識を持って改善していきたいと考えています。ありがとうございます。</p> <p>続きまして、木村委員、何かご意見はありますでしょうか。</p>
木村委員	<p>文化や歴史というものは生活に欠かせないものです。生活のインフラとも言えるべき重要なものだと思います。電気や水道と同様に、インフラと考えた上で進めていくべきではないでしょうか。</p>
出口委員長	<p>非常に大事なご指摘だと思います。本事業は文化振興ビジョン（第2期）に沿って進められています。次期文化振興ビジョンの策定はいつごろ予定されていますか。10年スパンでしょうか。</p>
事務局 (今西次長)	<p>現行のビジョンの計画期間は10年です。</p>
出口委員長	<p>木村委員のご意見は非常に重要だと思います。次期文化振興ビジョンの冒頭に盛り込むべき視点かもしれません。ありがとうございました。それでは井岡委員、ご意見をお願いいたします。</p>
井岡委員	<p>報告書を拝読し、非常に幅広い活動が行われていることを感じました。行政がこのような取り組みを実施することの困難さも感じます。また、音楽における活動について、演奏する立場から見ると、市民や専門家であれ音を鳴らしたら音楽になると考えがちです。しかし、本質的には、人に何を伝えるか、どのように感動を与えるかを考えることが非常に重要だと思います。本事業を通じて、市民や子どもたちに感動を与えるような活動を行うことを目指すべきだと思います。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。それでは落合委員、お願いいたします。</p>
落合委員	<p>「つどい、つながる文化の会議」が2年間経過し、手探りで進められてきた中で多くの収穫があったことは評価できると思います。今後、次年度は本格的な実践のフェーズに移るかと思いますが、市民アートコーディネーターという名称が広義的に捉えられている現状がある点は課題として認識しています。具体的な目標を明示しながら進めていく必要があると感じます。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。何か事務局から追加のコメントはありますでしょうか。</p>
事務局	<p>今年度は文化振興財団にもオブザーバーとして参加いただき、役割についての検</p>

発言者	発言内容
(今西次長)	<p>討を重ねました。市民アートコーディネーターとして文化芸術の裾野を広げる役割と、プレーヤーとして活動する役割の両者が存在する中で、今後も皆様と共に適切な形を模索したいと考えています。</p>
出口委員長	<p>今のお話は、こちらの7ページですね。3年間の計画として、「誰一人取り残されない社会を作る」というゴールが設定されていますが、今のお話からは、このゴールが明確に定められているというよりも、むしろプロセスの中でキャッチボールし合うことに大きな意義があり、その過程で揺らぎがあるというご発言でよろしかったでしょうか。</p>
事務局	<p>はい、そのとおりです。</p>
出口委員長	<p>また、「誰一人取り残されない」というフレーズは、SDGsのキャッチフレーズとして知られていますが、これは文化振興ビジョンの中で使われている用語ではないですよ。受託者であるSPSが記述された内容でしょうか。</p>
事務局	<p>はい、SPSが記述した内容となります。</p>
出口委員長	<p>理解しました。それでは、川本委員、お願いいたします。</p>
川本委員	<p>多くの資料を読ませていただき、深く納得しながらじっくりと拝読しました。その中で特に感じたのは、市民アートコーディネーターとは、市民が周囲の人々や物との関係性を再構築し、その中で文化活動を広げる役割を担う存在であるという点です。それは決して一方的に情報を伝えるだけの役割ではありません。例えば、「今度イベントをやるんだけど、手伝ってみない？」というような気軽な声かけを通じて、人々を自然につなげ、そこで生まれたコミュニティがさらに新たな活動へと広がっていく、そうしたプロセスを支える役割だと考えます。また、その過程で新たな人々が出会い、次の企画が生まれていくという小さな循環こそが、文化を育て、広げていく力になるのだと感じました。</p> <p>皆さんが執筆されたnoteの記事からは、参加者が取組を通じてどのように感じたのかが非常によく伝わってきました。また、取組の中で特に印象的だったのが、堺市の耳原総合病院に関する室野さんのお話を聞かれた参加者の感想です（文化の会議活動実績報告書 P.59～62）。そこからは、表面的な「良いこと」だけでは成り立たない社会の現実が示されていたと強く感じました。病院という場は常に「生」と「死」が交差する場であり、そこで働く人々の経験や思いが文化活動に結びついたことに、深い感銘を受けました。文化とは、心を豊かにするだけでなく、人とのつながりや経験の深みを通して初めて気づき、感じ取ることができるものなのだと改</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>めて感じました。このような活動を広げ、つなげていく役割は、社会をより良くしていくうえで非常に重要なものだと考えています。</p> <p>ありがとうございます。それでは、池上委員、よろしく願いいたします。</p>
池上委員	<p>文化の会議参加者について、私もその属性が気になっていましたが、多世代にわたる参加が実現したことは非常に良かったと思います。参加者は自分の得意分野や興味のある分野から活動を始めましたが、ツアーや実践を通じて他者との繋がりを築き、次年度にはさらにその広がりが期待されると感じています。また、これまで積み上げてきた経験が、市民アートコーディネーターとしての力をより具体化し、成長の基盤になるのではないかと考えました。ただ、次年度に実践として具体化する際に様々な課題があることも予測され、難しさを感じています。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。それでは、常盤委員より皆様のご発言を踏まえた追加のコメントをお願いいたします。</p>
常盤委員	<p>既に共有された課題はどれも非常に重要であり、多くの参加者が直面している部分だと感じます。特に、市民アートコーディネーターの定義や役割については改めて整理し直す必要があるかと思えます。現在、研修内容として「5つの“つ”」が示されていますが、参加者の中ではイベント主催者としての役割とコーディネーターとしての職能が混同されていることがしばしば見受けられます。本来、コーディネーターは必ずしもイベントの主催者である必要はなく、誰かイベント主催者から特定のコーディネート業務を受託する形で活動していくことも可能です。したがって、参加者が「イベントを主催できないといけない」というようなプレッシャーを感じることをないように、研修の内容を整備する必要があると感じます。</p> <p>研修の成果をより具現化するために、具体的な実践を通じて学びを深める方法を模索する必要があります。例えば、堺市では文化施設や市役所職員を主な対象とした職業者向けのアートコーディネーター研修を実施しています。この研修では、座学や体験型ワークショップ、そして地域の現場での実践を組み合わせで行っています。この研修では耳原総合病院をはじめとする市内団体に実践先となっただけに際して、研修の趣旨を十分に理解してもらい、教育的な姿勢で受講者を迎え入れてもらっています。このような形で受け入れ先をいわば研修の実施者側として設定し、実践を行える環境を整えることが重要だと考えます。</p> <p>また、福岡県の事業では居場所の運営をするボランティアや、地域活性化協議会所属の方々など、多様な背景を持つ人々を対象にした研修を行っています。その中では具体的な現場を自分自身で構築することが難しい参加者に対して、OJT形式で指導者が実際に現場を作るプロセスを示し、それに立ち会いながら学びを深めてい</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>く方法を取りました。研修内容やレベルについては、地域の背景を十分に考慮しつつ設計を行う必要があると感じます。</p> <p>ありがとうございました。それでは、他の自治体で似た趣旨のプログラムが多数存在しているという認識で良いでしょうか。</p>
常盤委員	<p>趣旨や規模については自治体ごとに異なりますが、似たような取り組みは多く存在していると思います。ただし、この事業のように職業者以外の一般の人々を対象とする中で実践に至る形まで到達している例は比較的少ないかもしれません。他自治体の事例を参考にすることで、この事業特有の内容を構築していくことが求められると考えます。</p> <p>また、岐阜県可児市において音楽ワークショップコーディネーター育成講座の指導を経験しましたが、そこではコーディネーターの研修にアーティストも参加しており、コーディネーター的な役割を模索する活動も行われていました。このように研修の形態に様々なバリエーションがあり、それらを踏まえながら独自の方向性を模索する必要があると思います。</p>
雨森委員	<p>はい、常盤委員のお話につき、次年度の実践の受け入れ先についても重要な課題ではないかと考えます。報告書の88ページにある令和8年の表を見ると、検討すべき要素が非常に多く、プログラムを設計することの難しさが伝わってきます。10年ほど前になりますが、大阪市立大学（現：大阪公立大学）で文化庁の助成を受けてアートマネジメントの人材育成を3年間行っていた際には、講座、ゼミ、実践という3段階に分かれていまして、実践のプログラムについてはすでに活動しているNPO法人などと連携し、実際の現場に受け入れてもらっていました。受け入れ先には、委託費として人件費を含む経費を支払い、受け入れのためのプログラムを企画・運営してもらうという設計です。専門職の場合、特に大阪や関西ではそのような環境が少ないため、いくら人材を育成しても出口がほとんどなく、人材が流出してしまうという課題に対して、既に活動している現場の人たちが正当な報酬を受け取り、仕事をする中で経験値を積んでいくことを内包するプログラムとして考えたものでした。</p> <p>市民コーディネーターに話を戻すと、市民コーディネーターが実践の現場で活躍するには、実は受け入れ側となる専門職のコーディネーターの意識やスキルが重要で、そのことを踏まえると、今後は専門職の人々が働ける現場を整えることも必要だと感じます。</p> <p>また、受け入れ先に謝金（そのプログラムにかかる労働力への対価）を支払うことは不可欠です。受け入れ先がそのプログラムに要する時間や労力に対する経費を適切に補償することで、通常業務を圧迫せず、より充実したプログラムが可能にな</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>るかと思えます。それぞれの現場でできることは異なるので、相談しながら丁寧にプログラムを設計していくことが必要となるでしょう。</p>
雨森委員	<p>ありがとうございます。コーディネーターという用語そのものに解釈の幅があるため難しいですが、先ほど常盤委員が話された「職業者でない」という表現については、報告書では「市民」という用語を使っているという理解でよかったですかね。</p> <p>雨森委員のご指摘に関連しますが、大阪市立大学（現：大阪公立大学）のプログラムとの違いとして、大学では専門的な基礎能力が必要で、入学試験やセレクションが設けられていたのでしょうか。</p>
出口委員長	<p>先ほど紹介した文化庁の補助金で実施していた人材育成事業は、学生の参加もありましたが、基本的には社会人を対象としたプログラムでしたので、入学試験はなく、誰でも参加できるものでした。文化庁の方針としても、学生よりも既に仕事をしている人たちのスキルアップを目的とするものです。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>茨木市のプログラムでは、人数の関係で公募し、定員を超えた場合は抽選方式が取られるのでしょうか。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>そうです。もし対応が難しいほどの人数が応募した場合には、抽選で選ぶ形を予定しています。</p>
出口委員長	<p>大阪市立大学（現：大阪公立大学）のプログラムは有償でしたでしょうか。</p>
雨森委員	<p>受講料を設定していたと思います。</p>
出口委員長	<p>コーディネーターの養成プログラムについては、様々な形式がありますが、茨木市のこの事業が何を特徴とし、どのような位置づけを持つのか、さらにどう評価するのかを明確にする必要があります。また、(堺市事業でいうところの) 耳原総合病院のような受け入れ先への謝金を検討する点は非常に重要ですが、予算的な制約があるため即答は難しいでしょう。ただ、そのような提案があったことを今後の検討材料として捉えていくべきです。このプログラムは行政が実施し、市民を公募で募るという形で運営されており、入学試験のように「公正」に選ぶのではなく、「公平」に抽選で選ばざるを得ないところに特徴があります。さらに、このプログラムが年数回しか開催されず、3年間という期間の中でサイトビジット（現地訪問）を取り入れ、評価者も活動に参加する形となっている点が大きな挑戦であり、従来の行政スタイルとは異なる部分に価値があると感じました。</p>

発言者	発言内容
井岡委員	<p>私がかつて愛知県長久手市に視察に行った際、市がホール運営を直接担い、文化振興に関する教育や市民への働きかけを模索していた事例を見ました。その運営者の方々は「やりがい非常に大きい」と話しており、市主導で文化振興が行われる例が非常に少ない中で異彩を放っていると感じました。同様に茨木市がこうした独自のプログラムを展開していることは、特筆すべき挑戦だと思います。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。他に何か追加のご意見はございますか。</p>
木村委員	<p>50歳の時に京都工芸繊維大学で教鞭をとることになった際、アーティストとして、何を教えられるのかと悩みました。そんな私に、当時の学長が、「芸術家としての視点を、科学技術の分野でも活かしてください」とおっしゃったことで、自らの体験をもとに、学生に語りかけ、対話につなげようと、心が決まりました。茨木市のプログラムについても、これまで以上に、茨木市における独自の体験や視点を基にした、様々な方の声を取り入れることができれば、より充実したものになるのではないのでしょうか。</p>
出口委員長	<p>茨木市のプログラムには、他の自治体では見られない独自性が潜んでいるように思います。今年度はそれを言語化するのが難しいかもしれませんが、今後の課題として捉えるべきです。参加者同士でトラブルがあった場合や、一部の参加者が途中で来なくなった場合、それを失敗と捉えず、新しい評価ポイントを見つける機会として活かすことができれば良いと思います。木村委員のご意見を受けて、現場を拝見された常盤委員から何か生のご意見をいただいてもよろしいでしょうか。</p>
常盤委員	<p>さらに、それが座学ではなく現場を見学するような形式を含めると、そういった活動の場は非常に限られています。その場でまず大事なものは、やりたい気持ちを持った市民が満足して帰れることです。もちろん、満足して帰るだけで何も生まれなければよい育成事業とはいえませんが、参加者のモチベーションを探ることもとても大切です。</p> <p>報告書にも示したように、様々な人が集まる中で一つの成果をつくるのは、仕事として活動している人に比べて難しいのではないのでしょうか。仕事として活動する人は互いに業務上共通する経験を持っているので、何かあってもどこかに落としどころを見つけ、妥協することが不可能ではありません。一方、欲求や関心から自発的に集まる人々の場合、なかなかそうはいかないでしょう。</p> <p>抽象的な表現で恐縮ですが、もしかするとコーディネーターを育成しようとするという、逆にコーディネーター育成に失敗するということなのかもしれません。とすれば育成の道筋とは、いろいろ試すうちに事後的に発見されるようなものともいえるのではないのでしょうか。さきほどの「環境」とはそうした学びの歩みが可能</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>になる設計と言い換えてよいと思います。</p> <p>今回の発言を受けて、何かご意見があればぜひお願いします。</p>
雨森委員	<p>「事後的に発見されるもの」、という常盤委員の発言がありましたが、市民コーディネーターは「育成する」というよりも、出会っていくとか、接点を発見していくことが重要だと思います。私の経験から言いますと、活動を通して、地域の方々と出会っていく、その中でプロジェクトに興味を持って協力してくれる方々が少しずつ現れてくるという状況が生まれます。そういった方々を地域コーディネーターとして意識的に頼っていくことで、その方たちの周りにはいる人たちとさらにつながっていくというように、その活動を地域内で広げていくことができます。児童館の指導員であったり高齢者施設の社会福祉士であったり、商店街の方であったり、町会の方であったり、様々なバックグラウンドを持つ方々との連携が、芸術文化の活動と地域、教育や福祉、街づくりなど多分野とつながっていく鍵となっていました。今後、「文化の会議」の外で起こっていくこと、自然な形で広がっていくことも内包されているような設計。大変高度なことだと思いますが、設計する側も学び、発見しながら、という態度が大事だと思います。</p> <p>また、前日も申し上げましたが、2年前に新しい文化振興ビジョンが策定され、「文化の会議」が重要な事業としてこの委員会でも答申が求められているわけですが、この文化振興ビジョンで掲げたことを実現するには、多面的な事業展開や予算配分を含め様々な施策が求められます。当然、他の事業も取り組まれていると思いますが、その進捗を本委員会でも共有し、幅広い議論をしていくべきではないでしょうか。</p>
出口委員長	<p>市全体としては、外部評価委員を入れて評価書をもらって、議会に報告しているということでもよろしかったでしょうか。</p>
事務局 (今西次長)	<p>市全体としては、事務事業実績報告という形で議会に報告しております。</p>
出口委員長	<p>雨森委員がおっしゃった文化政策全般という点ではいかがでしょうか。</p>
事務局 (今西次長)	<p>本委員会で行うべきところとしましては、文化振興ビジョン（第2期）を策定いたしましたので、計画期間である10年間、ビジョン全体の進捗管理を本来行っていくべきであり、今後評価を行う範囲を広げていく必要があると考えております。</p> <p>雨森委員からいただいたご意見に関しまして、市としては、令和6年度からの3年間を「つどい、つながる文化の会議」の準備期間としておりますことから、令和</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>8年度までは「つどい、つながる文化の会議」の事業評価を行い、令和9年度以降、文化振興ビジョン（第2期）の進捗状況全体をご審議いただく体制に切り換えていきたいと考えているところです。</p> <p>ありがとうございます。それでは、先ほど井岡委員から、市の職員がこうしたプロジェクトを通じて多くの学びが得られたというお話がありましたので、市職員の皆様のご感想や、このプロジェクトへの参加を通じて感じたことがあれば、一言ずつお聞かせいただけますでしょうか。順番はお任せしますので、よろしくお願いいたします。</p>
事務局 (中井部長)	<p>私は、令和4年度からこの委員会に関わらせていただき、ちょうど第2期の計画策定から携わる形となりました。外部から見ていた文化芸術ですが、実際に計画を作る過程で多くの学びを得ることができました。文化芸術が持つ役割や「文化的コモンズ」をはじめとするさまざまな考え方について、深い理解には至らないものの、その重要性や影響力を感じることができました。特に、東北の震災などをきっかけとして、まちづくりにおける文化芸術の役割が社会的インフラとして非常に重要であることを改めて学ぶことができました。この経験を行政施策に活かし、今後もそうした基本を重視して取り組んでいきたいと考えています。</p>
事務局 (今西次長)	<p>職員として仕事をする上で、文化芸術が特定の時間や形に限定されたものではなく、日常生活や人生の中で自分自身を豊かにしてくれるものであることを実感する機会が増えました。このような気づきを市民の方々にも広げていけたらと考えています。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>文化芸術やコーディネーターの定義に関して、それぞれの解釈が異なることを感じています。同じ文化会議に参加されている方々でも、多様な考え方を持っており、それがこの会議の良さであるとも思います。市民同士では比較的早く打ち解け合えますが、市職員との関係性については立場の違いから関わり方に課題を感じる場面もありました。それに対して、時には市側として踏み込んで自分たちの価値観を伝えることで充実したコミュニケーションが得られる場合もありました。市民との関係性を築きながら企画を練り直すプロセスはこれまでの仕事にはない楽しさがありました。次年度以降も参加者の思いを大切に、実践の場を設けながら進めていきたいと考えています。</p>
井岡委員	<p>例えば、豊中市ではホールを建て替えた際に指定管理による運営に切り替えたそうですが、茨木市には地の利があり、西宮に匹敵する活力を生み出せる可能性があると感じています。ただし、それを実現するには全員の協力が必要です。</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>それでは事務局の方からもご感想をお願いできますでしょうか。</p>
事務局 (松本参事)	<p>文化の会議に参加する中で、初めて市職員として市民の皆様とどのように関わらべきか手探りで進めてきました。特に、「5つの“つ”」という概念に基づいて、市民の皆様が自由に活動できる環境をどのように作るか模索してきました。しかし、途中から市民の皆様がこの場を楽しんでくださり、ご自身で繋がりや他分野との連携を深めながら活動を進めていく姿が見られるようになりました。この過程を一緒に見守る中で、私自身も文化の可能性や価値を改めて実感し、多くの学びを得ることができました。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。宮崎委員にご参加いただきましたので、ご感想や評価について簡単にお話いただけますでしょうか。</p>
宮崎委員	<p>はい、ここ2年間の活動について、市民アートコーディネーター育成という他の自治体では前例の少ない育成プログラムに携わることができました。参加者だけでなく、市職員の方々も手探りで進めていく中で、できたことやできなかったことを分析し、次の活動に反映させる姿勢が印象的でした。ゴールを誰かが定めるのではなく、参加者とともに関わること、茨木市における文化芸術のあり方を考え、築き上げるプロセスが非常にポジティブで貴重な体験でした。来年度は最終年度ということなので、この3年間の活動を集大成としてまとめられる機会になればと期待しています。</p>
出口委員長	<p>最後に事務局からもご意見をお願いいたします。</p>
事務局 (秋本)	<p>恐縮ながら発言させていただきます。私は、文化振興ビジョン（第2期）の策定の途中から携わらせていただき、「つどい、つながる文化の会議」については初年度から担当させていただきましたが、事務局側だけの視点では不十分と感じ、個人で大阪公立大学のソーシャルアートコーディネーター人材育成プログラムに参加し、参加者の立場も経験しました。実際にアートプロジェクトの現場に参画する中で、学んだことや体験したことを言語化する難しさを実感しました。一方で、その経験から、「文化の会議」の参加者の皆様との交流を通じて、委員の皆様のご意見でもあったような様々な発見や繋がりを得ることができたと感じております。またそれによって、文化会議の目指す方向性に少しでも寄与できたのではと感じる場面もありました。来年度も引き続き携わらせていただく予定ですので、参加者や関係者の皆様方と一緒に、具現化に向けて一歩ずつ取り組んでいければと考えております。どうぞよろしくをお願いいたします。</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>ありがとうございます。雨森委員や木村委員からの興味深い逸話に加え、職業的なアートコーディネーター育成というプログラムは、教育する側が豊富な知識を有し、明確な上下関係の中で指導が行われる形式だと思います。一方で、先ほどのご発言にもあったように、場の中で参加者が自発的に発見し、それを少しずつ形にしていくプロセスは、教育とは異なる新しいかたちの学びだと感じています。ドイツ語では教育を表す言葉には「Erziehung (エアツィーウング：引っ張る)」と「Bildung (ビルドゥング：場で作り上げる)」がありますが、現在の文化の会議はまさに後者のプロセスを重視しているのではないかと思います。この方法では、与える側が場を提供するだけでなく、参加者と双方向で吸収し合い、良い循環を生むことが可能です。さらに、こうした経験が職員の方々の別部署での業務にも役立てられるのであれば、非常に高い意義があると思われまます。</p> <p>本事業は行政の基本的なスタンダードの運営方法を踏まえています。市民に公平に参加を募り、能力差で分けることなく、一定の人数を超えた場合には抽選で選び、参加者同士が基本的な共通事項を共有しながら楽しみながら活動を進める形となっています。特にサイトビジット（現地訪問）を繰り返す中で参加者が積極的に関わる様子が見られ、楽しんでいることが感じられました。</p> <p>最後に、追加のご意見やご感想がございましたらお願いいたします。</p>
雨森委員	<p>次年度の評価指標についてお伺いします。この評価指標は次年度も同じ指標で進める予定でしょうか。評価を担当されたお二人にも、この事業に対する評価指標が適切だったかどうかについてのご意見をお聞かせいただければ幸いです。</p>
出口委員長	<p>次年度に向けて重要な議論だと思います。それでは、常盤委員からお願いいたします。</p>
常盤委員	<p>はい、経年的に同じ指標での調査結果を比較することは重要だと思うので基本は同一指標でよいと思われまます。ただし、進める過程で生じた新たな気づきについては協議し、必要に応じて指標を変更していくこともあり得まます。また、指標の数や煩雑さについても、評価作業の負担を軽減するために整理ができれば良いと思っています。</p>
出口委員長	<p>続けて宮崎委員、お願いいたします。</p>
宮崎委員	<p>評価指標については、常盤委員がおっしゃったように、経年比較を中心に進めるべきだと思います。ただ、指標はあくまでガイドラインであり、数値そのものを評価するのではなく、その値が生じた背景を深掘りすることが重要だと思います。指標は複雑にしすぎず、複数の視点から掘り下げていける形にすることが望ましいと</p>

発言者	発言内容
	<p>考えています。</p>
<p>出口委員長</p>	<p>ありがとうございました。他にご意見はありますでしょうか。</p>
<p>落合委員</p>	<p>細かい点ですが、報告書 88 ページの冒頭で「市民 AC」と表記されていますが、おそらくアートコーディネーターの略称だと思うのですが、このページにしか出てきていないので、記載の仕方を見直す必要があるかと思います。</p>
<p>出口委員長</p>	<p>ありがとうございます。今後、記載の仕方に注意していただければと思います。それでは、本日ご意見が出揃ったと考えますので、事務局の方から今後の流れについてご説明をお願いいたします。</p>
<p>事務局 (今西次長)</p>	<p>本案件につきましては、これまでの審議内容を踏まえ、答申書を作成してまいります。専門部会委員である常盤委員、宮崎委員にご協力いただいた報告書および本日いただいたご意見を基に、会議終了後には事務局と出口委員長で調整を行い、委員の皆様にお示しする予定です。</p>
<p>出口委員長</p>	<p>事務局からの説明がありましたが、委員の皆様、よろしいでしょうか。それでは、ご賛同いただいたということでありがとうございました。本案件は、以上となります。今年度の委員会は本日をもって終了となりますので、ぜひ事務局からも一言ずつご挨拶をいただければと思います。</p>
<p>事務局 (中井部長)</p>	<p>今年度も審議いただき、誠にありがとうございます。先ほどから話題に上がっている「つどい、つながる文化の会議」や「市民アートコーディネーター」に関する取り組みについてですが、形がまだ十分に定まらない中、私たちも試行錯誤しながら進めてまいりました。専門委員や委員の皆様からいただいたご意見やご助言を基に、少しずつ整理を進めて事業を積み重ね、形を作り上げていきたいと考えております。本日は貴重なご意見を多くいただき、ありがとうございました。</p>
<p>事務局 (今西次長)</p>	<p>皆様にはビジョンの推進に向け、丁寧に資料をご確認いただき、数多くのご発言をいただきました。これらひとつひとつの意見は、文化振興課にとって非常に大切な学びとなるものでした。振り返ってみても、改めて感謝の気持ちを感じております。本委員会を開催できたことに重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました。</p>
<p>事務局 (能勢課長代理)</p>	<p>本日はお忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。昨年度もそうでしたが、皆様からいただいたご意見を次年度の事業に生かしていくため、大</p>

発言者	発言内容
<p>出口委員長</p>	<p>変貴重な参考資料として活用しております。今後とも「文化の会議」を通じてご意見を頂戴できれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>事務局の皆様におかれましては、この1年間にわたり多くのご尽力をいただき、委員会の開催回数自体は多くはありませんでしたが、しっかりとした運営体制を整えていただき、誠にありがとうございました。</p> <p>また、各委員の皆様におかれましては、公私ともご多忙な中で本委員会にご出席いただき、感謝申し上げます。特に、専門部会委員兼任の常盤委員、宮崎委員には、現場の視察を含め多くの時間を割いていただき、さらに報告書の作成にもご尽力くださいましたこと、心より感謝申し上げます。専門部会委員のお二人が作成した報告書や、本日委員の皆様からいただいた貴重なご意見を十分に反映させ、「つどい、つながる文化の会議」をより良い取り組みへと発展させていければと考えております。また、次年度も本事業の評価について、引き続き審議を予定していると事務局から伺っていますので、その際もぜひ皆様のご協力をお願い申し上げます。</p> <p>noteの記事をぜひご覧いただき、ICTを活用しながらフォローアップしていただければと思います。本日は誠にありがとうございました。</p>
<p>事務局 (今西次長)</p>	<p>これもちまして閉会とさせていただきます。本日の会議録につきましては後日メールでお送りいたしますので、内容をご確認いただきました後、公開の形を取りたいと思います。出口委員長をはじめ、委員の皆様、本日は誠にありがとうございました。引き続き市政につきましてもご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。本日はありがとうございました。</p> <p>(閉会)</p>